

びわこの 考湖学

— 第二部 —

5

医学や科学が未成熟であった古代の人々は、病氣や災いは悪霊がもたらすと考えていました。悪霊は身体にたまたた罪や穢れに宿るとされ、やがては重病や災難をもたらすものとして畏られました。そのため、身体にたまたた罪や穢れを祓うことはとても大切なことでした。

7世紀後半から8世紀初めにかけて、律令体制の確立とともに古墳時代と異なった新しい祭祀形態が出現します。これを律令的祭祀と呼び、律令に決められた国家の平安や王権の安定を目的とするものでした。律令制度が全国に定着していくにしたがい、都の祭祀が地方にも広がっていきま

きました。そこで今回は、地方の

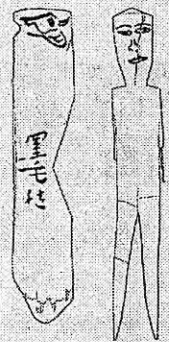
古代信仰の一つである、個人

遺跡で見つかる律令的祭祀

人形の多くは木製で長さ15

人形などの律令的祭祀遺物

馬形代と人形代（尾上遺跡）



人面墨書土器（下々塚遺跡）

病氣治癒のために罪や穢れを流す祓えに使われ、「ひとなでひと吹き」して自分の穢れを移しました。現在でも幾つかの神社では、紙の人形代や車形代が、病氣や交通事故の予防に利用されています。

を型取りして顔を描き、胴部に「黒毛祓」と墨書してあります。馬形は水神の捧げものとして用いられ、黒毛馬の土馬や形代は雨乞いに使われることが多いとされますが、尾上浜では人間の穢れや疫病を運び去るために馬の形代が使われたものでしょう。尾上遺跡では竹生島を望む湖岸に、斎串で結界された祭場をつくり人々の罪や病、穢れを祓う祀りを行い、人形、馬形、斎串とともに琵琶湖の流れに祓い

よう。また、野洲市下々塚遺跡からは人面墨書土器が出土しています。土器の表面に墨で喜・怒・哀・楽を表現したと思われる4つの顔が描かれています。いずれも大きな眉、目、鼻、口が特徴的です。守山市下新川神社に伝わる土器の表面には人面と海□・□幼民の墨書が記されています。人形が、自分の罪や穢れを移して祓うものであるのに対して、人面を描いた土器には自分の罪、穢れ、病を封じ込めて祓い、川に流し去ったのだと考えられています。

古代の信仰は、目に見えない恐れの世界を形代や土器に託し水に流し去ることで、人生の安寧を願ったのです。（財団法人滋賀県文化財保護協会 濱修）

ひとなでひと吹き 穢れを移す